

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

100年後も 失われない 美しさを目指して

トーハン本社のホールを彩るタイル

出版物の取次を行う株式会社トーハン(東京都新宿区)の新社屋が2021年に完成。1階のエントランスホールを演出するのが、オリジナルのタイルだ。このタイルを含め、空間全体のデザインを手掛けた佐藤達郎さんに、製作にまつわる話からタイルとの関わりまで幅広くお聞きした。

タイル製造工場を探しに多治見へ

淡い色合いの釉薬がおりなす模様は、空にゆったりと流れる雲を思わせ、壁全体が絵画作品のようでもある。「一枚一枚、模様が異なる手作りのタイルにこだわりました」と佐藤さん。このタイルの製作は、自ら製造工場を探すことからスタートした。



目地は幅を広めにし、タイルの表面より深くしている。「そのほうが、陰影が出ますから」。細部までの配慮が伺える。



タイルは5パターンを製作。コーポレート・カラーのブルーを中心に、配色が異なる4パターンと、立体型1パターン。サイズは190ミリ角、190×90ミリ、90ミリ角の3種類。



佐藤達郎さん

ステーションリーメーカー・デルフォニックスの代表兼デザインディレクター。オリジナル文具の企画デザイン、輸出入、および自社店舗ほかオフィスや住宅のデザインを手掛ける。

最初、ぼくが提案したタイルの製作について、施工会社から「困難だろう」と言われました。コスト的にも合わないのではないかと、肯定的な反応ではなかったんです。それでかえってやる気が増しましたね。親に反対された子どもみたいに(笑)。

ただ、自分で動かないと成し遂げられないなと思い、まず希望のタイルを作ってくれそうな会社を探しました。多治見の製造会社を何軒か訪ね、工場を見学させてもらい、「湿式で釉薬を使ったオリジナルのタイルを作りたい」と伝えました。すると意外にもみなさん、前向きに受け止めてくださったんです。数社がサンプルを出してくれ、その中の1社にお願いしました。

最初のサンプルはイメージしていたものと少し隔たりがありましたが、真摯な取り組みに「やってくれるんだな」と自信を得られましたね。釉薬を使う部分は、むしろ「難しいから挑戦したい」という様子で、現場にモチベーションがあることに救われました。

ぼくはタイルだけではなく、ほかの物づくりも手掛

新本社のメインコンセプトは「en(縁・円)」。出版流通の中心として、「つながりを広めよう」というメッセージを具現化しました。「エントランス(のデザイン)は自由な発想で」という弊社社長の声で、佐藤さんに空間全体のデザインをお願いしました。

エントランスホールは、来客の待ち合いの場として使われています。お客様には評判がいいですね。最近、ドラマの撮影にも使われました。

社員に実施した新社屋に関するアンケートでは「一枚一枚異なるタイルに愛着がわきました」「一枚として同じものがないタイル。うちの社員もそうですね」などのコメントが寄せられました。枚数は約1500枚で、当社の従業員数も同じくらいなんです。

けていて、これまでも同じ経験が何度かありました。現場に行くと「こんな素材があります」「こんなことができます」など宝物のような情報に遭遇することがあります。今回も実際に行ってみたら可能だったわけです。

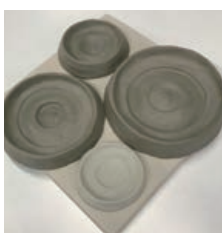
そうして製作がスタート。やりとりを何度も重ねながら、イメージするタイルに近づけていった。サンプル出しは4回に及んだ。

釉薬の仕上がりに納得いくものができるかが、ぼくの中でのテーマでした。タイルの表情出しについては、職人さんの意見を聞いて勉強しながら、やりとりを重ねました。

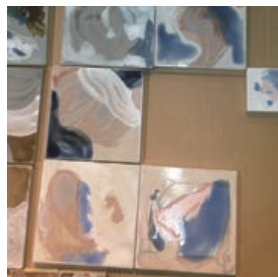
完成までは苦労しましたが、難しい注文にも関わらず、一生懸命、取り組んでくれました。意外と、意図していなかった面白い色味が出るなど、よいことも。当初はブルーと白を想定し、ピンク色は入っていませんでした。この色が入ることで、可愛らしさ、やわらかさが加わりましたし、オリジナル性を出せたと思います。製造会社、職人さんの力で、納得する仕上がりにたどりつけました。



壁に張る前にタイルを床に並べ、模様が均一にならないように全体の配置を確認した。



立体のタイルは、新本社のコンセプト「en(縁・円)」を表す。佐藤さんがイメージを絵に落とし込むことから始まり、粘土を使って型の原型を作成した。



初期の段階のサンプル。



近未来的なイメージのカウンターも佐藤さんがデザインディレクションした。

最後のチェックでは、トーハン、施工会社の担当者の方々と一緒に多治見に出向きました。サンプルが完成し、それを元に量産体制に入ってから、どんどん進んでいきました。

施工にあたっては、色のバランスを考えてパソコン上で5種類のタイルを配置。それを元にタイルを床の上に並べ、実際の色や模様を見て、均一にならないようタイル柄を並べ替えるなどして微調整を行った。1500枚にもなるタイルを一枚ずつ張ったのは、東京駅の赤煉瓦を手掛けたベテランの職人だ。

製作から施工まで10カ月の期間を費やして完成。一枚ずつ表情の異なるタイルは、社員のみなさんにも好評と聞く。

南欧と日本で見てきたタイル

これまでのエピソードから、佐藤さんのタイルに対する熱意が伝わってくる。その背景には、ヨーロッパの建築やアート作品、そして日本のモダニズム建築があるという。

仕事でヴィンテージアイテムを買い付けることもあり、ヴィンテージタイルが好きなんです。自宅アトリエの壁には、ベルギーで買い付けたタイルを、自分で並びを整えて張っています。

イタリアの骨董市でジオ・ポンティ設計のホテルに使われていたタイルを見つけたときは、あるだけ買って日本に送ってもらいました。元々、個人的にそういうことをしていたんですね。

出張先ではよく建築を見に行きますが、スペインのアルハンブラ宮殿のタイルも素晴らしいですね。泊まった近くのホテルでは、階段から何から至るところにタイルが使われていて、日本でもこのくらい多くのタイルがあしらわれているホテルがあっても面白いのになと思っていました。

取材では数冊の作品集もを見せていただいた。南フランスの焼き物の町・ヴァロリスで活動した陶芸作家・ロジェ・カブロン(1922-2006)、カブロンと親交があり陶芸作品も数多く創作したピカソ、ジャン・コクトー、シャガール…。作家たちの工芸作品からもインスピレーションを受けている。

昨年に出版された
ロジェ・カブロンの
作品集。



右ページの作品は三角形の立体タイルを
一点一点、並べて作られている。
カブロンは、タイルのデザインも手掛けた。

タイルを含め、住宅パーツの写真をファイルに
まとめている。



旅で見つけたタイルや住宅パーツの写真はファイルにまとめ、物づくりの資料としている。ちなみにジオ・ポンティのタイルの写真は職人にイメージを伝えるために提示した。遡って、幼少期に身近にあり影響を受けたという日本のモダニズム建築についてお聞きした。

子どもの頃から建築を見るのが大好きでした。広島県呉市の生まれなのですが、当時の市民ホールが坂倉準三さん設計の円形の建物で、外壁が湿式のブルーのタイルでした。子どもの頃、そういう建物を身近に見ていた影響は大きいと思っています。

当時のモダニズム建築を率いていた前川國男さん、吉村順三さんのタイル使いにも、惹かれるものがあるんですよ。上野の東京都美術館や岡山県庁舎には、前川さんの定番のレンガタイルが使われていて、見るだけでしびれます。

解体された旧ホテルオークラ(設計:谷口吉郎)には、階段の踊り場に波うつ表情が際立つタイルが使われていました。建て替えの際、家具は売りに出されましたがタイルは出ていなくて、剥がしに行きたかったくらいです(笑)。



エントランスホール全体の風景。アーティストがデザインしたタペストリー、奥には北欧名作家具も設えられている。

今回のタイル製作では、そうした当時の湿式タイルの味わいを出したかったという。ヨーロッパのタイルとは異なる、日本のタイルの魅力は何だろうか。

比較研究をしたわけではないですが、やはり日本のタイルは品質がいいですね。欧米のタイルはざっくりしている印象があります。

南フランスからポルトガルに向かう電車の沿線には、陶器の会社がたくさんあります。多治見と同じ焼き物の産地ですね。車窓から器やタイルを日干ししている様子が見えますが、やぼったさがある。でもそんな素朴さが味わいになっています。

一方、日本のタイルは国民性を現しているのか、きめ細やか。今回の製造会社さんもきっちりときれいに仕上げてくれました。また、洗練されていますよね。トーハンのタイルは海外でも面白がってもらえるんじゃないかと思います。

今回多治見を訪れ、アメリカのプールの多くに日本製のタイルが使われていることを知りました。輸入してまで使いたいと評価されているのだと思います。

最後に、今後タイルに望むことについてお聞きした。

素材感や色彩に味があるタイルがもっと作られるといいですね。50年、100年、孫の代になってもよさを感じられるような。音楽やデザイン、他のものにも同じことが言えますが、飽きがこない、何度見てもいいと思えることが大事だと思います。

今回のタイルも、長いいいなと思えるものを目指しました。またタイルを作る機会があれば嬉しいです。

佐藤さんのタイルへの深い愛情の下、多くの力が結集し、生み出されたトーハンのタイル。社屋ではあるが、受付の方に一言伝えれば見せていただけるそう。写真では伝えきれない質感や色合いをぜひ味わってほしい。

トピックス タイルとストリート・アート

イギリスを拠点に、世界各国の街に作品を残すバンクシーは有名だが、彼のように名を明かさず、タイルを使った作品を制作するストリート・アーティストをご存知だろうか。モザイク作家・喜井豊治氏に、そのユニークな活動について紹介していただいた。

パリのインベーダー



モザイク作家・喜井 豊治



東京・恵比寿で見つけたインベーダー

パリの街を歩くと、スペースインベーダーのタイルモザイクに出会う。

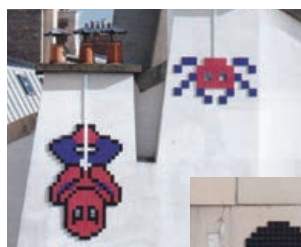
建物の壁、擁壁や橋脚、高いところではエッフェル塔にもある。アニメのドラゴンボールのキャラクターやガンダムなどもあり、パリ市内に1500ほどあるというが、意識していないと案外気がつかない。

モザイクは正方形のタイルをマス目に沿って並べた、いわゆるピクセルアートと呼ばれるもので、初期のテレビゲームの少ない画素数の画像と同じ感じである。

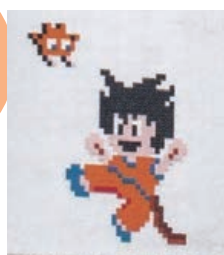
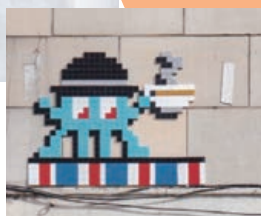
作ったのはインベーダーという名前で活動するアーティスト。パリがインベーダーに侵略されているという設定で、これらのモザイクを1990年代後半からゲリラ的に設置し始めた。無許可で設置したものはもちろん違法なので、剥がされることもあるが、その数は案外少ない。剥がして転売しようとする者もいるが、しっかり取り付けてあるので、壊さずに剥がすことは無理だ。作者の本名は不明だが、個展も開きアートマーケットでは高値で取引される。個展会場には、仮面をつけて現れる。法律違反者に協力しているということで、画廊主が2週間刑務所に入れられたこともあるという。

街に物語を取り込む

遊び心のある時代描写でもあり、街に物語を取り込み、膨らませてくれる仕掛けでもある。見つけるとその場所が親しみのこもった特別な場所になる。



パリの
インベーダー
たち



多治見駅前商店街



多治見ながせ商店街



喜井 豊治
(きい・とよはる)

モザイク作家として国内外で活躍するほか、モザイク普及に尽力。最近の仕事に「ひらまつホテルズ&リゾートすい野座」の壁画制作がある。

インベーダーの公式サイトによると、2024年2月5日の時点で世界各国83都市に4168点の作品が張られている。東京にも138点張ったそうだが、何点かはすでに撤去されている。世界中の作品を撮影して、その数を競うFlashinvadersというアプリもあり、撮影された写真が公式サイトにアップロードされている。各都市のインベーダーマップもある。

これをフォローするアーティストが世界中に現れた。勝手に設置しているので、ある意味迷惑なことではあるが、こういうものも文化の厚みのひとつなのだろう。日本人の噂は聞かない。

*

これを多治見で試してみたらどうかと相談したところ、モザイクタイルミュージアムの前学芸員村山氏が提案し、たじみDMO が企画した。タイル名称統一100周年記念のイベントとして、2023年、多治見駅近くのながせ商店街と駅前商店街の有志がタイルモザイクを作り、各自の店に設置した。

この試みが長く続き毎年少しずつ増えていけば、独特の物語も生まれてくるのだろうと私は夢見ている。

タイルを魅せる

パワーあふれる作品たちが
タイルの楽しさと魅力を伝える

2023年12月1日～2024年2月3日、名古屋モザイク工業 大阪
ショールーム(大阪市中央区)のギャラリーにてEnjin(エンジン)の展
覧会が開催された。タイル職人やアーティストらのメンバーによる渾身
の作品の一部を紙上でご紹介。合わせて結成の経緯や今後の展開
について、作善堂・水野千早さんにお聞きした。

「生まれる森」中村ジュンコ

オリジナルの備前焼タイル、オブ
ジェなど様々な素材を使用し、
生まれてから天に召されるとい
う生き物の一生を表現。見るほ
どに物語を感じさせる。

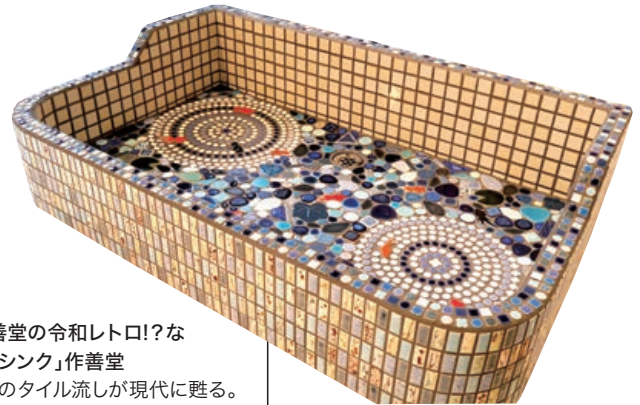


「Pig Kainer」佐々木康至／マイト
スペインタイルを割って使用し、本来
硬くて曲がらないタイルでやわらか
な曲面を表現。墨を加えた目地が全
体を引き締める。

「作善堂の令和レトロ!?な

金魚シンク」作善堂

昭和のタイル流しが現代に甦る。
1960年～現在までに生産された
タイルを、制作時の気分で選んで
配置。新旧タイルのコラボレーシ
ョンで、現在過去未来をつなぐ。



「銀龍 silver dragon」

TSUCHI-YA-TILE

10ミリ角タイルを使用し、髭など細部まで作り込まれている。
タイルの光沢によるウロコにつやが生命力を感じさせ、う
ねりのある胴体が今にも動き出しそうな迫力を出す。



Enjinメンバー

中村ジュンコ(モザイクタイルアーティスト)

佐々木康至／マイト(作家・タイル職人)

作善堂(タイルシンク制作/岐阜県多治見市)

山周セラミック(10ミリ角のタイル・モザイクタイルアート製造/岐阜県多治見市)

TSUCHI-YA-TILE(作家・タイル職人)

NO TILE NO LIFE(大阪でタイルショップ、イベントを運営)



会場全体の風景(上)。入り口脇
のガラスケースで来場者を迎え
る「タイルマン」は佐々木さんが
制作(下)。通りがかりの女性が
写真におさめていた。





「星、暗闇こそ輝きを増す」
中村ジュンコ
作品名はアメリカの作家・ステファニー・メイヤーの言葉から。星形タイルは兵庫県淡路島、周囲のタイルは愛知県常滑市で製作されたもの。

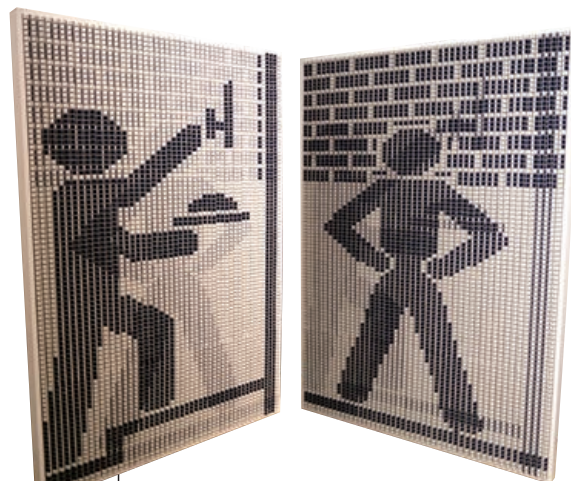


「キリン 〜静と動〜」
佐々木康至／マイト
スレンダーなシルエット、深い赤色のタイルで彩られた姿に、サバンナで孤高に生きる野生動物を見る。



「タイルの塔」NO TILE NO LIFE
岡本太郎「太陽の塔」と曾根研「ゆらぎの壁」をオマージュ。工事の余剰材やデッドストックを多く使用しており、珍しいタイルを見つける楽しみも。愛嬌を感じさせる佇まい。

「ライオンノッカー巨大」
TSUCHI-YA-TILE
造形作家・水嶋裕一さんとコラボレーション。目と毛並みの白い部分は、蓄光モザイクを使用し、ブラックライトを当てると光る。



「10mm角」山周セラミック
左から右方向へ見ていくと絵柄が変わるトリックアート。左右の絵柄のタイル2枚を山形に組み合わせるという細かく地道な作業に脱帽。タイルを張り終えた職人の誇らしげな姿がほほえましい。

Enjin結成の経緯、今後の展開——

呼びかけ人、作善堂・水野千早さんに聞きました

—結成の経緯は？

2022年11月に多治見で開催された「タイル百年祭」がきっかけです。Instagramで懂れていた佐々木さんに会うことが叶いました。初めましての嵯峨さん(NO TILE NO LIFE)、土屋さん(TSUCHI-YA-TILE)。仲良しの山周さん、中村ジュンコさん。この日に全員が集い、私が勝手にEnjinメンバーを決めました(笑)。このメンバーで何かをしたい！と展覧会のお声がけをしました。

—グループ名の由来は？

タイルの『縁』でつながった『人』。タイルを未来へつなげたい、そんな想いで“円陣”を組み“エンジン”全開で走る人間の集まり、それがEnjinです。

—展覧会開催の経緯は？

名古屋モザイク工業の早田会長に「やりたいことがあるんです！」とプレゼンに伺いました。いつも「いいね、いいね」と優しく聞いて、「こうしたら？」とアドバイス、「頑張って」とエールをくださいます。その後、大阪ショールームにつないでいただきました。

—「タイルを魅せる」に込めた思いは？

Enjinメンバー全員がタイルに携わる仕事をするプロです。そのプロがどんなタイルを選んで、どう使うのか。タイルをどう活かして、どう楽しんでいるのか。自由に感じていただきたいという思いから、「タイルを魅せる」にしました。

—今後の展開は？

タイルを知らない方にも見ていただきたい！という思いがあります。人の集まる公共施設や劇場、学校、空港、駅などで展示ができれば嬉しいですね。Enjinのオリジナルタイルの製作販売も夢です。

—ほかに伝えたいことはありますか？

タイルを作る、貼る、使う、売る大人がいる。なんだか真剣に楽しそう。なんなんだ？と、私たちを見て、タイルという物に興味を持ってほしいです。その先には日本、世界にいるタイルを扱う素晴らしい方々に出会うことができます。タイルの未来が明るくなりますように。これがEnjinの願いです。

次回開催
決定！

3月30日～5月31日
名古屋モザイク工業・名古屋ショールーム
(愛知県名古屋市名東区)